

中日近代文学に於ける主題走向について

——その密閉と開放——

南 海

要 旨

本文は中日近代文学に於ける主題の走向問題について論ずる。個性自由への追求、人間としての尊厳を求めるのは中日両国近代文学に於ける共通した主題であるが、形態は実にそれぞれ異なっている。自然主義を主潮とする日本文学の場合は大体「密閉的自我」の形態であるのに対し、写実主義を主流とする中国の「五四」小説は「開放的自我」を見せている。このような違いから当然来るべき結末もそれぞれ異なり、情緒基調や審美風格も異なっている。宗教的解決や極端なときには自我壊滅にまで発展していく日本近代作家らのやり方に対し、世を治め、民を救う文章、永遠に変わらざる伝統的な作家精神が中国近代作家には数多く見られる。本文はこのように出発点、形態、結末、基調及び社会的要因といくつかの視点からより深い問題を扱う。

キーワード：個性の自由 密閉 開放

はじめに

二十世紀前後、個性の自由や社会の解放にめぐる主題が中日両国の近代作家らにつきまとっている。中日近代文学はその進行過程において、自我の主題や社会主題が互いに消長を見せながらも、それぞれ異なる移り変わりを示している。中日近代文学の主題走向を考察するうえで、この歴史上密接な繋がりを保ち続け、また現実的な境遇において完全に異なる国の文化や政治的異変が見透かされ、またその中から両国の知識分子らのそれぞれ異なる運命や価値観をも伺えるだろう。各自社会やそれぞれの文化に於ける新旧交替段階としての中日近代文学の主題態勢に対する考察もなおさら特別な意味を持っているだろうと思われる。

I 同じ出発点と異なる形態

個性的な自由への追求、人間としての尊厳を求めるのは中日両国近代文学出発点に於ける共

通した主題とも言えるだろう。まさにこの最初の第一歩こそ、両国文学を現代世界文学の門に足を運ばせる存在である。日本の自然主義小説と中国の「五四」小説の主題を比べてみれば、一つの共同的な意識ポイント、即ち人間の解放というのが焦点としてわれわれの視野に入ってくる。これはただなる合致ではなく、似ている文化背景や外来思潮による共同的な影響を受けていたからにほかならない。中国と日本はオリエント文化圏に於ける儒家文化の最も代表資格のある民族とも言える。西方近代文学は中世紀の神権体系が個性自我に対する扼殺を最初の主題だとすれば、中日近代文学の主題は儒家理論体系の人間性への扼殺に対する批判だと思われる。

近代までは、儒家倫理体系を中核とする封建宗法制が中日両国の社会や文化を形成する土台であり、そういった社会秩序の中で、人群れや社会をもって人間の意識や行動の最高の準則とされ、中日両国の社会思想史は元より倫理が個人に対して制約する歴史で、人間の本体に対する認識は倫理学の単なる序言に過ぎなかったとさえ言えるのである。西方近代思想による啓蒙の下で、中日両国の作家達はまず個性の自由を自らの叫び声とし、彼らは昔風のそういった強迫的な偽りの理性を憎み、封建道徳に虐げられた人間の解放を求めたのである。福沢諭吉の「自國は自國にて自から獨立せんとすることなり」の思想や、魯迅の「立人而立国」の思想、又は夏目漱石の「自我本位主義」及び周作人の「個人主義の人間本位主義」等はこの時代思想の反映とも言えるものである。

田山花袋の『蒲団』と魯迅の『狂人日記』とを代表作として、中日現代文学創立初期に現れた小説はいずれも旧道徳に対する批判、新道徳へのアピールを主題としたものであった。旧道徳にとらわれれば、往々にして人間の命の中にある最も素晴らしいものが見捨てられてしまうことである。それで個性解放の必然前提と成すものは、言うまでもなく封建宗法倫理体系の否定である。それゆえ、中日両国それぞれの近代文学の発端期において共通的な自我主題が形成されたが、最初から自然主義を主潮とする日本文学と写実主義を主流とする中国の「五四」文学の形態が実に異なっていることが分かる。前者の主題は大体「密閉的自我」とも言える形をとり、一方後者は「開放的自我」と多く言われるところである。

前述したように所謂「密閉的自我」とは社会との隔たりの中で自我を完全なものにすることによって個人の価値を実現し、個人の悲劇に対する感受性の内に社会を改造する目的感が含まれていない、社会との政治対立意識は更に少ない。作品人物の運命は最終的に壊滅か虚無へと向かって進むのである。自然主義小説及びその後の漱石小説はほとんどこの範囲に属している。また開放的自我というのは現実社会との対立の中でその社会を改造することによってはじめて自我価値の実現や人間的解放に達することである。人物の結末も大概悲劇的なものでありながら、個人の悲劇を社会の責任といつも明確に帰結しているため、その後の自我の社会化への転換に内在的基因を提供した。魯迅小説や問題小説及び創造社小説等の主題は多くこうした開放性が備わっている。

ここで漱石の『門』と魯迅の『傷逝』を例にしよう。中日両国の近代文学の創立期において、作家としての地位が酷似している二人が出現した。すなわち魯迅と夏目漱石である。二人の大家の創作はそれぞれ国の早期文学の最高水準を代表していたとともに、両国の文学における自我主題の進展変化の過程を具体的に表現し、またその後の文学主題の最終走向をも予知した。『門』と『傷逝』は二人の大家の晩期小説とも言えるものである。小説の筋や内容、雰囲気から人物の心境にいたるまで、まるで双子のように酷似している。二人とも自分の小説を通して自我主題への反省に努めたが、両者の主題判断の出発点が完全に異なっている。夏目漱石の場合は、個性解放主題自体に対する懐疑が社会の意図を順応するうえで自我選択に対する反省へと内化している。一方魯迅は個性解放主題の走向と帰結に対する懐疑は、個性解放の起点から社会解放の終点への外化と期待していた。すなわち、彼はもっと高いところから個性解放自体を肯定したとも言える。

それでは、まず作者の夫婦離合に対する見方から小説の自我主題を見てみよう。

二部の小説に出てくる人物は、いずれも往事顧みること堪えらざるという懺悔の気持ちを共に持っていた。しかし、その内の意識焦点となる所はそれぞれ違っている。宗助は友達に背き、その友達の妻である御米との結合に対して懺悔していた。彼らの結合は人間世俗道德からの裁判を受けざるを得なく、「世間は容赦なく彼等に徳義上の罪を背負した。然し彼等自身は徳義上の良心に責められる前に、一目茫然として、彼等の頭が確であるかを疑った。彼等は彼等の前に、不徳義な男女として、恥づくべく移る前に、既に不合理な男女として、不可思議に移ったのである」と自認していた。彼らは自分の選択に対し自責ないし恐怖さえ感じ、最後に自分の生活の中に出てきた不幸を道義に背いたことによる「因果応報」にまで帰結した。それで社会に対する批判的な能力やすべての欲望を喪失し、自我解放によって自我反省へと内化し、ないし個性を消滅して社会世俗道德に應じるような傾向を示したのである。これに対して涓生の懺悔は、子君との過去なる「合」にあるのではなく、現実的な取り返しのつかぬ「離」にある。つまり、涓生は個性解放に対し懐疑するのではなく、それを肯定し、強化したのであり、しかも「離」の懺悔は更に彼の社会に対する批判的な力を引き起こしたのである。魯迅は潜在的な理性段階では涓生のもっと高い人生追求によって子君との「離」を肯定したのである。これは子君がすでに昔の戦友から世俗的な妻に変身したからであり、涓生は子君への不満が人情に欠けてはいるが、彼女がもっと高い人生追求を持ってほしいと考えていた。しかし宗助は御米の終日労苦を厭わずに家事労作に耽っていることに対し感激し、妻のために、又は自己のためにその他の人生追求を全く頭に入れていないのである。

宗助と涓生とが社会や自我に対して異なる認識を持っているからこそ、彼らのそれぞれの愛が同じような社会的な圧力のもとで異なる変形を生み出したのである。宗助は人生のすべての追求を放棄し、家庭生活をただ唯一の内容とし、外力の圧力によって宗助と御米が「水中にある二滴の油のように、自然に結成し一体となり」、世との隔絶した、狭い世界に安住していた。

彼らは社会中において成長する余地はなく、内に向けて発展を目指すほかはない。作者は人物の外在世界における不安を内心に押し入れて、現実の思考を内心倫理への反省に転換させ、完全に密閉した自我の世界を成し遂げたのである。

宗助は人生追求の放棄によって愛が固められたのであり、逆に涓生の外側への自我執着のあがき、家庭以外の追及を放棄しないというのは、家庭崩壊の内在要因となったのである。涓生の理性的判断の中に、家の崩壊は新しい自我追求の始まりであり、その社会に対する憎悪の心持は彼の個性を社会改造の段階に導きやすい存在となり、彼は個人理想の実現を満足し、停止したのではなく、引き続きもっと重要な自由の路を探りつづけている。魯迅はここで小説の主題を個人の自我密閉的な世界より社会改造に通じる自我解放の世界へと引き入れているのである。恐らくこの時期から中国現代文学の自我主題は作家の冷たい目つきを感じ始めたのかもしれない。

それでは宗助はまたどのように苦しみの中で「門」を見つけたのかを見てみよう。宗助と御米の結合は罪を負う感覚によるものであるため、彼らは終始精神的な苦痛を感じ、負罪感と幸福感、自我と倫理の交錯によく付き纏われている。また社会意志の背きを代価に個人の自由を獲得したが、心の中に蓄えてきた伝統的な道義によって自分の獲得した自由な幸福感が相殺されてしまう。彼らは精神的な囚人となったのである。宗助の神経が絶えず負罪感に圧迫され、家庭以外の精神支柱を探さなければならなくなる。ではこの支柱とはいったい何なのだろうと聞くと、宗助は歩きながら絶えず「宗教」の二字を呟いていた。案の定、彼は涓生のように積極的に社会を迎え撃ち、社会との対抗の中で正面から自我を拡張したのではなく、負罪感意識に駆使されつつ、世と隔絶する世界の中で自ら自我を消滅し、個性解放の追究の中でさらに一歩退き、現実を逃避しながら宗教の門に入ったのである。最終的に彼は門の下に佇み、日没を眺める不幸者となったのである。現代人類社会と絶縁した世界の中で何らかの慰めを見出すとは、自我固執で壊滅に終わるよりも更に悲しい。

中日近代文学における初期主題の段階の相違は、両国作家が異なる環境の下で考え出した、異なる選択の結果でもあるが、この異なる小説主題の選択と成す主なる要因は、両国のそれぞれ異なる社会や文化伝統にほかならない。

II 異なる結末と異なる基調

中国現代文学における自我解放の主題は、当初から群衆や民族の解放を一体と結びつく内在的な基因を持っている。しかも当時中国の政治、思想状態も現代小説の自我主題の開放性に何らかの可能を提供したのである。

日本の明治維新は政治的な思想から言えば「尊皇攘夷」を出発点としたゆえ、現代日本の政治思想の厳密性や保守性にかかっているわけである。しかし、同じような現代文学の起点とし

て、逆に中国の「五四」運動は封建倫理思想体系に反対することによるものだから、初めからも社会に対して一種の反逆的な情緒が存在している。しかも中国社会の現実もこうした反逆の実現に外在的な条件を提供した。中国封建王朝の終焉は古代普遍的な王権意識にとってその政治的な保護層を失わせたため、崩壊に瀕しているのである。その後、中国の現代史においては、いかなる政党や政府が政治上では中国全体を統一せず、中国では終始二種類の政権が対立する状態となる。これは作家達に反社会思想、すなわち文学の自我主題の開放にある程度の隙間を提供し、また文学主題の結末に於ける走向に具体的で、明確な帰結をも提供した。これは社会が芸術に対し成し遂げた悲劇性のある選択であると言ってよい。

密閉的な自我と開放的な自我、この二種の異なる走向の主題が人物運命の異なる結末にかかっていて、中日近代文学における異なる情緒基調や審美風格を形成させた。

日本近代文学における自我をめぐる主題が外向きの拡張力を失ったために、自我の世界以外の所で確実な支点が見つからない。そこで文学の主題は奥深くて暗い、涼しくて肌寒い境界へと移っていく。人物の運命結末もほとんど悲劇的である。正宗白鳥の小説『何処へ』の中に出てくる人物も「気違いか、死か、宗教に入るか」という選択に直面していた。また大正2年10月5日附の、夏目漱石が和辻哲郎にあてた手紙の中で、次のように述べている。「私は今道に入らうと心掛けてゐます、たとひ漠然たる言葉にせよ道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません、冷淡で道に入れるものではありません」と。

では、漱石は一体どういう道に入ったのだろうか。同じく大正2年朝日新聞に連載されていた彼の小説『行人』に注目してみよう。病的なまでの孤独に陥ってしまった主人公の一郎を旅に連れ出したHさんが、一郎を観察しながら次のように報告するのであるが、それは作者漱石が「道に入りたい」と心ひそかに願う心境とけっして無関係と思えないのである。その「三十九」の冒頭に、「死ぬか、気が違ふか、宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない、兄さんは果たして斯う云ひ出しました。其時兄さんの顔は寧ろ絶望の谷に赴く人の様に見えました」とある。

という、「死か、発狂か、宗教か」のいずれかを選ぶ外に道はないといった三者択一の問題が提出されることになる。ここで漱石の求めようとした「道」は、単なる倫理道德を超えた、むしろ宗教的実存ともいえる世界であったように思われる。

日本現代自我主題小説の結末は次の二種類にほかならない。すなわち自我を消滅し、宗教に帰依することによって精神的な慰めを獲得するか、または自我に固執し、人格の独立を保ち続けることによって肉体の壊滅を受けるかということである。

宗教的解決法は日本現代文学作品においてよく見られることで全く珍しくはない。漱石の宗助が宗教の門に入りたのであるが、最初に仏門に入ったのは硯友社文学である。尾崎紅葉の『青枕』（1890年）に出てきた女の主人公、芸者の佐太夫は生涯にわたって栄枯盛衰、墮落に甘んじて、自我覚醒の意識が芽生えたが、最終的に相変わらず仏教に帰依することによって

人生の苦痛から解脱が得られるのであった。幸田露伴の『風流微塵』(1891年)はオリエントの悟道に徹するやり方で解決する。宗教または悟道に徹するやり方が、日本作家の自我を保持する、若しくは自我を消滅する思想の行き先である。白樺派作家志賀直哉の『暗夜行路』の中の主人公時任謙作は最初母の不倫に悩まされ、その後また妻の不貞に苦しめられた後、彼は伯耆の山に登り病気になったのである。山の上で一夜過ごしたら、心身が共に大自然に融けこまれてぼんやりとした感じに耽っていたのである。昔自我意識の存在によって苦悩を感じたのであったが、この時また自我の消滅によって苦悩が消え去り、天人一致の境界に達し、永久不変の道を見出したのである。

日本文学の中に現れた濃厚たる宗教の色彩は、作家の宗教思想と関わっていると見てよい。まずキリスト教の影響は中国よりずっと深いものと見られ、とりわけ日本現代キリスト教大師内村鑑三の影響の元で、多くの作家達はいずれも教会の洗礼を受けたのである。仏教の作家達に与える影響は言うまでもないことである。

この宗教式またはオリエントの悟道に徹する解決法は中国現代文学の中ではまれにみる現象である。「五四運動」の時期には許地山、葉聖陶、王統照らの小説の中に確かに「愛と美」という哲学や宗教色彩が見られるが、その大多数はこれを起点にし、また終点とする作家ではない。彼らの創作主題は曖昧でつかみ所のない雲より忽ち人間の現実的な地面に落ち戻り、抽象的な人類精神より社会の自我へと転化している。そのなかで、王統照はこの点において最も代表的な作家の一人であろう。

日本作家の宗教式追求にしても、または中国作家の自我外向きの傾向にしても、いずれも自由の道を探り、自我と社会との間に一種の心理的な釣合を図っているのである。この意味では日本作家の選んだ自由への道はあまりにもぼんやりとしてはっきり見えず、ないしは空しい幻だと言えよう。人間は所詮現実社会の中で生活するから、自我への追求の放棄もしなければ、また自我以外の社会では有力な支点を見出そうともしない。密閉した自我に固執すれば、最終的に自我の壊滅となるのである。

漱石小説の中で主題が社会との間隔が拡大したことにより、人物の運命も日増しに暗澹としていった。その後の三部曲の中において、人物が順次に伝統的な道義とオリエント哲学の誘惑の下で、自我本位主義に対し更に懐疑の念ないしは完全に否定し、いずれも自ら墓を掘り、壊滅に向かって進んでいったのである。文学世界の情緒は作家の精神の現れであり、また作家の生活した道とも互いに影響を与えている。

有島武郎の場合、自我壊滅はただ芸術の世界に限らず、しかも実際の生活行為に付し、彼は自殺したのである。その四年後、芥川龍之介も絶望してしまった。『或阿呆の一生』を書いた時芥川は彼の一生を思い、涙や冷笑の込み上げるのをどうすることもできなかった。「彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだった。彼は日の暮れの往来をたった一人歩きながら、徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した」と。これこそ、あの『行人』の一郎の「死ぬか、

気が違ふか」ということの確証でなくて何だろうか。「僕も亦正宗氏のやうに如何なる社会組織のもとにあつても、我々人間の苦しみは救ひ難いものと信じてゐる。」そして、「僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた」（『或阿呆の一生』）。そこで彼は大量の安眠薬を飲んだ後、再び目を醒めますことなくこの世を去つたのである。自殺した芥川の枕辺には、ただ一冊聖書が置かれていたのである。その前後に自殺した現代作家は、北村透谷、生田春月、太宰治、牧野信一、川端康成ら数十人にのぼつたのである。「新思潮派」作家雅川晃氏は、1928年のある座談会で「文芸は自我を忠実せねばならぬもので、作家はこの道ではひたすら最後まで歩み続けるが、通じなかつたら、自殺する」と述べた。日本作家のこうした自我壊滅は、彼らが密閉した自我に固執した必然的な結末を表したと同時に、仏教の来世観や武士道の作家に対する影響をも伺えよう。これも日本現代文学における宗教情緒と伝統文学崇拜とが、日に日に強化していった重要な要因であろう。

文学史家の猪野謙二氏は厳密な研究を行った後、次のように考えている。日本明治文学の出発点は「自我実現を目標に」したが、この主題史が逐次に低落を見せる過程であり、「覚醒から幻滅へと、上昇から下降へと、近代における自我の確立が政治自由の追求より倫理主義の自我追求へと転化した。これは明治作家の芸術の原点である」と。

それに比べて、中国の現代作家らは、密閉した自我に固執することも少なく、宗教観からの影響も少ない。その代わり世を治め、民を救う文章永遠に変わらざる伝統的な作家精神が数多く見られる。現代中国における三十年の歴史が民族や階級闘争の主題を貫いていた。民族の存在と滅亡、国家の危機などは民族全体の人々の高ぶる意欲が最も奮い立たせられるものであり、この群衆の意欲が個人の悲しみ憎みよりも、幅が広く、格調も高い。日本現代文学の消沈したり、悲しみ憂えたりする「物の哀れ」と違い、悲憤慷慨し、高揚する意欲は二十一世紀における中国文学の基本的な格調である。

「五四」文学は、濃厚たる悲劇的な色彩を持っていることは否認できない。しかも郁達夫の小説は「頹廢文学」とさえ言われた。しかし少し比べてみれば分かるように、日本文学の情緒が悲哀で意気が沈んでいて、全体的に言えば審美的風格が温和で淑やかな美を見せながら、一方中国文学の場合は基調が悲憤高揚的で、陽性的な美を表現したのである。

郁達夫らの声は感傷的なものに違いないが、彼らは自我の実現を嘆願している。しかしこの感傷的な主調の中に、社会に対する憤激した反抗意識が加わっている。小説の人物はその運命もほとんど悲劇的であるが、意識のはっきりとした精神復活である。「我々は大いに嘆き、後悔し悩んではいるが、絶対に悲観せず、失望もしない。我々の涙が出産の時の痛みになると確信している」。彼らの小説の中に出てきた感傷は、社会に反抗する精神内郭の上に世紀末の色彩を塗り付けたに過ぎないだろう。その後の中国文学にかけては、悲観で絶望的な色彩が極めて少ない、ひいては伝統文学の一家団圓の結末といった理想的な審美圏に入っていった。

III 異なる走向を育む史的要因

中日両国近代文学における異なる走向は、文学そのものの基本的な価値が実社会に適していないというのではなく、もっと広い意味では、この基本的な価値が両国それぞれの特定した社会や歴史的發展と深く関わっているのである。中日両国の近代に於ける政治、経済、イデオロギー及び対外関係などの進み具合がそれぞれ違うだけに、近代文学のこうした実現形式における差異、すなわち「開放的」と「密閉的」とが生じたのである。ここで、文学そのものの価値観が両国のそれぞれの歴史と有機的に結びついていると言えないことはないだろう。

中国近代文学は民族危機が危機一髪時代に生まれた。近代そのものが文学に与える人間的地位の向上、人間的価値観や独立及び開放の獲得といった歴史的使命は、「救亡図存」という民族危機を救う時代要求と必然的に結びついてくる。甚だしくは、もはやある程度では時代形勢の危機感によって、その後者は前者をまるまると包み、よって前者の文学的な価値観が充分に実現しえない状態に陥ったのである。それで文学そのものの独立性や発展などが抑えられ、現実的に社会政治の要求に適応せざるを得なくなる。まして従来中国文学は倫理的な価値標準を重視しているため、その倫理性が新たな歴史時期において、また往々にして政治性に転化していくのである。近代史では維新派であろうと、革命派であろうといずれにも終始文学を思想啓蒙のための最良の道具と位置づけしている。当時大多数の作家は、リアリズムによって国家の興衰や民族存亡などの大きな国家的課題を主題にして執筆していた。いわば高度な歴史的、社会的意識が中国近代文学そのものを実現する極めて特殊な道であるとともに、その未来における走向をも構成したのである。五四運動以後の中国文学もかなりこうした発展形式を受け継いでいるとも言える。

一方、資本主義の出現と同時に誕生した日本近代文学は、初期において、自我のアピール、個性の開放といった目標を確立したが、最初から挫折させられたのである。これは日本近代文学が相手にしたのが絶対主義の天皇制国家にほかならないからである。日本近代史上には「幸徳秋水の殺害事件」のような民主や自由への押さえつけと弾圧した史実がかなり記載されている。が、自由と民主はまた終始人間を誘う理想的なユートピアである。作家達は外面的に社会環境の重圧を受け、内面的に矛盾心理の苦しきも受けながら辛い苦痛と辛酸の中で細かに探索し、ちょこちょこ潜行せざるを得なかったのである。よってリアリズムには根本的な深化が得られず、浪漫主義は厳酷な社会現実の前においてその理想的な輝きが失われるどころか、官能的な享楽へと逃避し、自然主義もまた自我の狭苦しい世界に潜り込んでしまった。そして文学全般そのものは社会を離脱、政治を回避する道を歩みだした。文学的には輝かしい宮殿を構築したものの、人々の住む社会より遠ざかっていて、いわば俗世的な雰囲気欠けしていると書いても良い。これは明治から大正にかけて大した変化が見られずほとんど同じであった。

おわりに

ここまで密閉的自我と解放的自我とを中日現代文学におけるそれぞれの基調として述べていたが、いずれにしても、個人の世界は狭い、個人の力も取るに足りぬものであると言ってよい。日本作家は個人の世界を出ようとはせずに、何畳かの小屋に固執して苦慮しながらうろついたあげく、悲哀の結末に終わってしまう。これに対して、中国作家はその作品の主題を当代社会に近接させたのみではなく、自分自身も大概政治活動の参与者であった。彼らは世に出たら政治に参与し、身を引いたら筆をとって文を作る。そういうことによってある程度の心理上の釣合が取れるわけである。しかも文学主題の世界においては、自我の開放性によって個人世界よりももっと広々とした、有力な精神支柱が見出されるのである。孤独や悲しみといったものが相殺できる。全社会と足並みを揃え、群体の大きな悲痛の中において自らの慰めや解脱が得られる。これこそ中日近代文学主題走向の出発点における意識と情感の相違ではなからうか。しかもこうした相違は両国の文学伝統、文学観念及び外国文学とはそれぞれ密接な係わりを持っているが、なんとと言っても両国の近代社会や歴史の進み具合によったものだと言えるものではなからうか。

参考文献

- 福沢諭吉『文明論の概略』1875年 福沢蔵版
刘中树『魯迅的文学観』1986年 吉林人民出版社
夏目漱石『私の個人主義』1992年 筑摩書房
周作人『人的文学』1918年 『新青年』第5巻6号
芥川龍之介『文芸的な、余りに文芸的な』1968年 筑摩書房
見西垣勤『有島武郎論』1979年 有精堂
郭沫若『我们的文学新运动』1923年 『创造周报』第3号

(Contemporary Japanese Literature, 日本近代文学)